

断が困難な症例であった。

### 23. 両側副腎転移を来した肝細胞癌の1例

金田 暁, 阿部顕治, 高梨秀樹  
篠崎文信, 内海勝夫, 小林千鶴子  
吉田孝宣, 武者広隆, 森 博志  
(国立千葉)  
高沢 博 (同・研究検査課)

症例は70歳の男性。主訴は体重減少。輸血の既往がある。肝障害、高血圧で近医通院中であったが、体重が6ヶ月で9kg減少したので腹部エコー行ったところ肝内に腫瘤を認めたため、当院に紹介入院となった。HCV抗体陽性でCT、血管造影より肝右葉のHCCと診断、TAEを施行したが、3年後両側副腎転移を来し、副腎皮質機能低下を生じた。当院のHCC260例のうち転移を確認したのは60例、23.5%で、肺、骨、リンパ節の順で多かった。

### 24. 右房内発育型肝細胞癌7例の臨床的検討

長谷川茂, 品川 孝, 塚原常道  
石井良実, 飯野康夫, 宇梶晴康  
一戸 彰 (上都賀総合)

右房内腫瘍塞栓を伴った肝細胞癌について、生前に診断し得た7例の検討を行った。結果は、(1)右房内腫瘍塞栓の頻度は3.9% (178例中7例)、(2)主な症状は呼吸困難、下腿浮腫、(3)全例に肺転移あり、(4)心電図上の特徴的所見なし、(5)心エコーの診断的有用性、(6)予後不良であったが、治療有効例が2例みられた。

### 25. 30歳以下の若年性非B非C型肝炎の2例

石井良実, 品川 孝, 塚原常道  
長谷川茂, 飯野康夫, 宇梶晴康  
一戸 彰 (上都賀総合)

症例1は、30歳の女性。Fibrolamellar Hepatocellular Carcinomaで、その発生に合成女性ホルモンが関与した可能性が考えられた。症例2は、24歳の女性。高分化型肝細胞癌で、心房中隔欠損症、子宮欠損症といった先天奇形の合併がみられた。尚、2症例共、HBsAg、HCVAbは陰性であった。若年者に発症した肝細胞癌の報告は極めて少なく、文献的考察を加えて、ここに報告した。

### 26. HBcAb弱陽性肝細胞癌の臨床的特徴

望月剛実, 土合克己, 松浦直孝  
広岡 昇 (都立大久保)

当科における肝細胞癌87例中、HBsAg・HCV抗体

ともに陰性の症例は10例であり、アルコール因子を除いたHBc抗体弱陽性例は4例であった。この4例は全例肝硬変を合併していたが肝機能は良好であった。肝細胞癌は細小肝癌においても全例血管増生を伴っており、治療後他部位に再発した症例は認めなかった。

肝硬変・肝細胞癌の成因については、HBsAgが陰性化してはいるが、HBVの持続感染が示唆された。

### 27. カラー Doppler による肝腫瘍血流の検討

遠藤恒宏, 安原一彰, 中村広志  
木村邦夫, 西新井宏美, 森 義雄  
山本駿一, 家里憲二, 吉田弘道  
堀 潤朗, 長谷川律子  
(千葉社会保険)

Dynamic CTや組織所見との対比から、カラー Doppler 検査での腫瘍血流の消失所見が肝細胞癌治療の効果のひとつの指標となりうるという報告が見られている。しかし実際に血流信号が消失、あるいは血流が残存した場合の長期経過を検討した報告は殆ど無い。肝細胞癌治療後の経過観察におけるカラー Doppler の有用性について、寛解例と再発例を比較し検討した。経過観察中に肝細胞癌が再発した5結節の内、4結節にカラー Doppler 検査上血流再出現または血流残存所見が認められた。一方寛解した6結節ではこれらの所見は認められなかった。以上の結果より侵襲性の無いカラー Doppler 検査は再発の発見に有用であると考えられた。特に超音波検査にて増大傾向の無い肝細胞癌の再発をカラー Doppler にて捉えたことは、肝細胞癌再発の早期診断にカラー Doppler の応用が可能と考えられた。

### 28. 副腎転移に対してエタノール注入療法が有効であった肝細胞癌の2例

塚原常道, 品川 孝, 石井良実  
長谷川茂, 飯野康夫, 宇梶晴康  
一戸 彰 (上都賀総合)

近年の肝細胞癌に対する画像診断および治療法の進歩により、従来は稀とされていた遠隔転移症例に遭遇する機会が増えている。肝細胞癌の副腎への転移は肺について二番目に多いとされているが、その治療法に関する報告は現在のところ少ない。我々は、肝細胞癌の副腎転移に対し超音波映像下エタノール注入療法を2症例に施行した。当療法は、施行に際し大きな合併症は認められず、転移巣に対し有効な治療法の一つと考えられた。